

タラント奇襲直前の1940年9月、英空母アーク・ロイヤルの上空を編隊飛行するソードフィッシュ。



「真珠湾」を先取りした航空機運用

タラント奇襲作戦

第2次大戦勃発から1年。
イギリスとイタリア両国海軍は、
地中海の覇権をめぐりしを削っていた。
そこで、戦いの形勢を一気に有利にすべく
イギリス海軍は前例のない奇襲作戦を敢行した。
たった1隻の空母から発艦した21機の複葉機、
目指すはイタリア海軍の主力艦隊が碇泊する要衝タラント港である。

文=伊吹秀明

【地中海におけるイタリア艦隊】

ドイツ軍がポーランドに侵入した一九三九年九月、第二次世界大戦は勃発するが、この時点でのイタリアはまだ中立を保っていた。

ベニト・ムッソリーニが腰を上げるのは、ドイツ軍の猛攻によってフランスが降伏する直前のことである。一九四〇年六月十日、英仏に対して宣戦布告したイタリア軍は、英領マルタ島に空襲をしかけ、フランス南部に侵攻を開始したのである。

フランスの降伏後、イギリスはドイツ、イタリアの二か国を相手にしなくてはならなくなった。島国イギリスにとっては、海上の交通路がそのまま生命線となる。ドイツの通商破壊艦（主力はUボート）と並んで脅威だったのは、イタリアの国土そのものと彼らの保有する艦隊兵力だった。

地図を見れば一目瞭然だが、足のような形をしたイタリア半島は地中海に深々と踵を降ろしている。地中海はスエズ運河を通じて、紅海、インド洋に連なるイギリスの大動脈であり、イタリアの艦隊兵力を排除しないかぎり、地中海においてイギリスが戦略的に追いこまれることは必至だった。

しかし、一方のイタリア海軍にとっても、現状はかならずしも満足すべきものではなかった。ムッソリーニの野望とは裏腹に、実は参戦できるほどの準備が整っていなかったからである。

タラント奇襲を成功させた、イギリス地中海艦隊司令長官アンドリュース・B・カンニングハム大将。



イギリス軍の奇襲により苦杯を舐めさせられた、イタリア第1艦隊司令官イニコ・カンピオニ大将。

主力の戦艦に限って記せば、第二次大戦時に在籍したイタリア戦艦七隻中、六月の参戦時に行動可能だったのは、コンテ・デ・カブールとカイオ・ジュリオ・チェザレの二隻に過ぎない。この二隻の古い姉妹艦は、三年前に大がかりな近代化改装を済ませたばかりだった。

だがその後、七月にはカイオ・デュイリオ、十月にはアンドレア・ドリアがやはり大改装を終えて戦列に復帰する。イタリア海軍首脳部がもつとも期待をかけていた新式戦艦のヴィットリオ・ヴェネト、リット

リオはそれぞれ四月と五月に竣工し、六月は慣熟訓練の最中だった(三番艦のローマの竣工は二年後となる)。両艦は、常備排水量四万三三八五トン、三八センチ砲九門、三〇ノットという強力な戦艦である。こうして秋頃になって、ようやくイタリア海軍は戦力が整いつつあった。

ヨーロッパの枢軸国の中では、ドイツ海軍の戦艦ビスマルクに目が行きがちだが、ドイツは巡洋艦以下の補助艦艇が少なく、実質的な作戦運用能力は低いといえる。これに対して開戦時のイタリア海軍は、巡洋艦二〇、駆逐艦五九、潜水艦一一六隻といった多数の補助艦艇を有しており、実はドイツ海軍に比べて水上戦力のバランスはとれていた。無論、大海軍国のイギリスに比肩するものではないが、活動を地中海に限ってみれば、その脅威は大きかった。

一九四〇年七月七日、マルタ島の住人たちが疎開させるため、イギリス地中海艦隊司令長官アンドリュース・B・カンニングハム大将は自ら艦隊を直率して出撃した。主力は戦艦三、空母一隻である。イタリア側はI・カンピオニ大将の指揮する艦隊(主力は旧式戦艦二隻)が迎え撃った。九日に戦端が開かれたこの戦いは、のちにカラブリア岬沖海戦と呼称されることになる。

劣勢のカンピオニは、味方空軍の支援を得ようとしたが、海軍との共同訓練をしたことのない空軍機は味方の上に爆弾を落とす始末だった。幸い、同士討ちにはならなかったが、敵にも命中させられなかった。結局、本土の目と鼻の先まで接近を許しながら、イタリア海軍はイギリス艦隊の行動を阻止することはできなかった。

続く十九日、クレタ島北西にてイタリアとイギリスの小艦隊同士が遭遇した。スパダ岬沖海戦である。ここでもまたイタリア側は戦術的なミスを犯し、イギリス軍が勝利をおさめる。このカラブリア岬沖、スパダ岬沖の二つの海戦後、イタリア海軍は艦隊兵力の温存を図るかのように、タラント軍港に引きこもってしまった。艦艇数こそイギリス地中海艦隊を凌駕するイタリア海軍だが、実は積極的に打って出られない訳があったのである。

最大の理由は、備蓄燃料の不足である。イタリアの石油は、一〇〇パーセント海外からの輸入に頼っていた。開戦時の海軍の備蓄はわずか九か月分の一八〇万トンしかなく、そこからさらに三〇万トンが空軍と産業用に供出させられていた。

また予定されていた空軍の支援も、カラブリア岬沖海戦の醜態から分かるように期待できなくなった。連携攻撃だけではなく偵察さえもろくにできず、仮にイギリスの船を発見したとしても、正確な情報が遅れて伝わる有様だ。また空軍とのあいだだけではなく、海軍の組織自体にも悪しきセ

年の航空艦隊司令官時代、空母レキシントンとサラトガを率いた演習でパールハーバーの奇襲に成功している。

あとは、誰が実戦でやり遂げるかだけになっていた。

ライスター少将はイタリアがエチオピアに侵攻した一九三五年、当時の英海軍軍令部長フィッシャー卿からイタリア艦隊を爆撃する計画の立案を命じられており、戦前から空母機による軍港の奇襲攻撃を研究していた人物である。カニンガムはその計画に乗ることにしたのである。

かつてミッチェルが実験したのは、大型爆弾による水平爆撃が主だったが、カニンガムとライスターが考えたのは、ソードフィッシュによる雷撃である。航空魚雷を戦艦の喫水線下に命中させ、大量の浸水によって引導を渡すのだ。

しかし、問題点も多い。水深の浅い港で雷撃は不可能と考えられていた。飛行機から投下された魚雷は一〇〇メートル近くも沈下するため、たちまち海底にぶつかるとになる。それがクリアできたとしても、戦艦の周囲に張り巡らされている水雷防御網をいかに突破するか……。

ライスターの幕僚たちは、その問題に取り組んだ。

【ジャッジメント作戦】

空母機を使うといっても、当時、地中海艦隊に所属していた空母はイーグル一隻の

みだった。地中海の西、要衝ジブラルタルには日部隊のアークロイアルがいたが、別の艦隊に所属しているために動かせない。

イーグルは、第一次大戦中、チリ海軍の注文によって建造中だった戦艦アルミランテ・コクレインを買い戻して、空母に改造したものである。イギリス海軍三隻目の空母として、一九二〇年に就役したベテラン艦だ。

搭載するフェアリー・ソードフィッシュ艦上攻撃機も、鋼管布張り、複葉、固定脚という旧式なスタイルの機体だった。いや、初飛行は一九三四年だから、時期的にはそれほど古いものではない。ただ、日本海軍ではその二年後に、やはり複葉の九六式艦攻から全金属製、低翼単葉、引き込み脚の九七式艦攻に移行しようとしていた。アメリカ海軍でも一足先に、単葉のダグラスTBDデバステーターを採用している。

世界の航空技術は急速に発達を遂げつつあったが、ソードフィッシュは時代に取り残された飛行機だった。英語でメカジキの意味を持つこの機体を、英軍パイロットたちはストリング・バック（買ひ物袋）と呼び、露骨に第一次大戦の遺物と称していた。

それでも、この古い空母と時代遅れの艦載機は、地中海艦隊にとって貴重な戦力だった。七月から八月にかけて、イーグルの雷撃隊は三回のトブルク港攻撃を実施し、駆逐艦オストロや潜水艦イリデーなど五隻ものイタリア軍艦艇と三隻の貨物船を撃沈していた。敵の防御がそれほど堅固でなか

タラント奇襲直前の地中海情勢



① イギリスH部隊

戦艦	1~2
空母	1~2
巡洋艦	2~4
駆逐艦	10~12
潜水艦	2~5

② イギリス地中海艦隊

戦艦	2~3
空母	1~2
巡洋艦	5~7
駆逐艦	28~32
潜水艦	8~12

③ イタリア艦隊

戦艦	6
重巡洋艦	7
軽巡洋艦	11
駆逐艦	約50
潜水艦	約100

※イギリス艦隊では比較的頻繁に艦艇の入れ替わりが生じており、日時を限定しないと各艦隊所属の艦艇隻数の特定は難しい。

開戦当時、フランス、イタリア、イギリス各国は北アフリカに植民地を擁していた。フランスの降伏により親独のヴィシー政権が樹立されるとイタリアはリビアからエジプトへと攻勢をしかけた。一方、イギリスは地中海の輸送路をイタリア本国とリビアにはさまれる形になっていた。バルカン半島ではユーゴスラビアを支配下に置いたドイツ軍が、アルバニアに進駐していたイタリア軍とともにギリシャ侵攻を目論んでおり、これに対してイギリス軍は海上輸送によるギリシャ支援を決めていた。イタリア海軍は本国の他、リビアにも海軍部隊を配備しており、イギリスとしては海上輸送路確保のためにもイタリア海軍を叩いておく必要があった。

イギリス地中海艦隊の空母イラストリアス。タラント奇襲では単艦敵地に乗り込んだ。



ったとはいえ、少数のソードフィッシュが挙げた戦果としては大きなものである。

九月二日になると、カニンガム大將が待望していた空母イラストリアスが地中海艦隊に配属されてきた。同艦は五月に竣工したばかりの新鋭空母である。搭載機数は三六機と二万三〇〇〇トンの空母にしては少ないが、その代わり飛行甲板には装甲板が張り巡らされた重防衛の艦だ。速力も三二ノットと、二四ノットのイーグルよりも優速だった。速度が速いということは、艦載機の発着艦時に必要な合成風力を得やすくなるということである。

カニンガムたちを喜ばせたもうひとつの

ものは、イラストリアスが運んできたソードフィッシュ用のドロップ・タンク(増槽)だった。これで攻撃隊の航続距離を伸ばすことができる。

カニンガムは、マルタ島の空軍にタラント軍港の偵察を依頼し、二隻の空母による襲撃計画を練り上げた。作戦コード名は、ジャッジメント(審判)である。審判は夜に下されることになった。昼間では奇襲の成功率は低く、鈍速のソードフィッシュでは敵の戦闘機から逃れることはできないからだ。攻撃は、夜襲以外あり得ず、搭乗員たちは夜間攻撃のための訓練に励んだ。

幸い、マルタ島の空軍基地には、それまでの飛行艇よりも高速のグレン・マートイン偵察機が三機配備されたばかりだった。これにより、精度の高い偵察情報を手に入れることが可能となり、タラント港にはまだイタリアの主力戦艦が碇泊中であることが確認された。

こうしてカニンガムが決めた作戦予定日は、十月二十一日のトラファルガー記念日である。ところが、「審判の日」を前に、イギリス側はたび重なるトラブルに見舞われることになった。

まずイラストリアスの格納庫で火災事故が起こり、二機のソードフィッシュが全焼した。原因は金属ハンマーの火花が、酸化したガソリンに引火したためと判明したが、火災を免れた機体もスプリングラーの海水を浴びて、分解と点検が必要となった。

さらに空母イーグルの方も、十月十二日

のマルタ島への船団護衛の途中、イタリア軍機の空襲によって至近弾数発を受けた。帰投後、航空機用燃料パイプが破壊され、海水が混入していることが判明する。

これ以上の遅延は、イタリア軍に作戦を察知される恐れがある。イーグルの参加は断念され、カニンガムはイラストリアス一隻で攻撃することを決意した。イーグルからは艦載機五機がイラストリアスに移され、作戦に加わることになった(資料によつては六機。また、D・マッキンタイアの『海戦』には、イーグルから移された多くの機体は燃料タンクの汚染によって使用されなかったと記述されている)。

イラストリアスの艦載機パイロットたちの中には、かつて空母グロリアスに乗り組んでいた者もいた。同空母は、六月八日、ドイツの巡洋戦艦シャルンホルストとグナイゼナウの砲撃によつて、ノルウェー沖で沈んでいる。空母が砲撃によつて撃沈された非常に珍しい海戦だが、グロリアスの生存者たちにとっては、相手の国は違えど、戦艦に復讐する機会を得たことになる。結局、たった一隻の出撃となり、雷撃機の数も減ったが、イラストリアス艦内の志気は高かった。

十一月八日、イラストリアスは、戦艦ウォースパイト、ヴァリアント、マラヤ、ラミリスとともにアレクサンドリア港から出撃した。巡洋艦と駆逐艦も多数伴っていたが、それらはマルタ島への輸送船団の護衛も兼ねていた。

十一日、輸送を終えて無事帰途についた船団とは反対に、イラストリアスはカニンガム座乗のウォースパイトとともに北進を続けた。やがて昼間のうちにマルタ島に派遣したソードフィッシュが、最新の偵察写真を携えて帰艦してきた。そして最後の分析がライスター少将やイラストリアスのボイド艦長、そして作戦参謀たちの手で行われた。

タラント軍港はマール・グランデと呼ばれる外港と、マール・ピッコロという内港から成っている。戦艦はマール・グランデに緊留されるが、昨日まで五隻だったものが六隻に増えていた。「カンピオニニは我々のために、標的を増やしてくれたらしいぞ」とボイドはいい、皆をわかせた。

写真では艦種までも特定できた。大改装を終えた三二センチ砲一〇門装備のコンテ・デイ・カプーレ級二隻、カイオ・デュイリオ級二隻、そして三八センチ砲九門を装備した新型のヴィットリオ・ヴェネト級二隻。イタリア海軍の戦艦すべてが勢ぞろいしていた。重巡は、マール・ピッコロの入り口に三隻、内側に二隻。さらに内港には四隻の軽巡と一七隻の駆逐艦が船先をならべて碇泊していた。

港湾施設や防備状況にも目を配る。最も重要なのは対空砲座と水雷防御網の位置で、タラントの対空砲の数は二〇〇門にも達し、その中にはドイツから供与されたばかりの八八ミリ高射砲一二門も含まれていた。

注意すべきはもうひとつある。写真のシ



魚雷を投下するソードフィッシュ。複葉機という前時代的な機体ながら、イギリス海軍を代表する艦載機だった。

ミに見えた白い点は、阻寒^{そくさ}気球だった。参謀のボロック大尉が拡大鏡で探し当てた。

阻寒気球とは、ヘリウムを充填した気球を長いケーブルで係留し、敵機の侵入を阻止するものである。ケーブルで翼をひっかける。シンプルだが、イギリスの軍港ではドイツ軍機相手に効果を上げていた。

戦艦を囲む阻寒気球は、陸上に五つ、水上の艦^{ふね}に六つの計一一個と少なかった。イギリス軍にとっては幸運なことに、タラントでは六〇個以上あった気球が最近の嵐のために多くが破損していたのである。

気球と気球の間隔は、およそ一五〇メートル。ソードフィッシュの翼幅は一四メートルなので、すり抜けるのはたやすい。もっとも、夜間飛行であることを考えると、油断は禁物である。

入念な準備を行ったとはいえ、敵地に飛びこむのだ。危険なことに変わりはない。時折、イタリア空軍の偵察機が接近してきたが、レーダーでそれを捕捉したイラストラアスはフルマー戦闘機を使って撃墜、もしくは発見されないうちに追い払った。日没直前の一八時、カニンガム大将の旗

艦ウォースバイトから、イラストラアスに向けた最後の信号が瞬いた。

「貴官の部下の任務遂行と幸運を祈る」

ジャッジメント作戦のクライマックスが訪れた。イラストラアスはウォースバイトと分かれ、単艦タラントに接近した。イラストラアスの艦上では、ソードフィッシュの発艦準備が整った。歴戦の複葉機には、青灰色の迷彩塗装が施されていた。

二〇時三五分、タラントの南東一八〇海里的地点で、ライスター少将は攻撃隊の発進を命じた。まずは第85飛行隊のケニス・ウィリアムスン少佐の機が発艦した。ウィリアムスンが指揮する第一次攻撃隊は一二機である。それから五〇分後には、第89飛行隊のJ・W・ヘイル少佐を指揮官とする第二次攻撃隊九機が続いた。

ミストラルと呼ばれる地中海特有の北風を衝き、わずか二機の複葉機は敵の軍港を目指した。

【タラント、奇襲せり】

イタリア半島をブーツに例えると、タラントは踵の付け根に位置する港湾都市である。一八六一年のイタリア統一以来、アドリア海のシーパワー確保のため、軍港として整備されてきた土地だった。一九四〇年現在でも、イタリア海軍の最重要拠点であることに変わりはなく、そして今、主力艦すべてがここに集結していた。

イラストラアスを発艦した第一次攻撃隊

のうち、視界不良のために三機は単独飛行となった。そのうちの二機、アイアン・スウェイン機が真っ先にタラント上空に到達した。

夜空からでも、防波堤、碇泊艦船、巨大な海軍工廠、クレーンなどがうつすらと見えた。目障りな阻寒気球の姿もある。しかしたった二機で突っこんでも意味はない。スウェインは周辺をぐるぐるまわって友軍機の到着を待った。

一五分が経過し、ようやく攻撃隊が到着した。

ソードフィッシュは三座だが、重量軽減のために機銃員^{ガンナー}が降ろされ、各機の乗員は操縦員と航法員の二名である。第一次攻撃隊一二機のうち、六機は雷装、残り半分は爆装していた。爆弾は一二〇キロ徹甲爆弾六発。爆装機のうち二機は、爆弾四発と一六発のマグネシウム照明弾を吊下していた。

二二時五〇分、照明弾の投下から攻撃が開始された。照明弾は、バラシユートによってゆっくりと三〇〇メートル降下してから時限装置が働くようになっていた。化学反応の黄色い光の輪が、タラント軍港の艦艇や港湾施設を照らし出す。

続いて、今度は赤い光が軍港を染める。爆撃隊がマール・グラndeを突つき、軍港東側の燃料タンク群に投弾したのだ。すすましい音とともに、闇の底で紅蓮の炎が舞い上がる。それは攻撃側にとって、第二の照明となった。

雷撃隊は、乱舞する光を横目に低空から

タラント奇襲作戦

一般的に不可能といわれていた水深の浅い港の中で雷撃ができたのは、ソードフィッシュとマーク18魚雷の性能に負うところが大きい。時代遅れの複葉の超低速機とわずかに七メートルしか沈下しないマーク18の組み合わせが、この攻撃を可能にしたのである。

また魚雷の信管にも特徴があった。複式起爆装置というもので、魚雷が艦底を通過する際、艦の磁気に反応して爆発するようになっている。つまり魚雷は、水雷防御網の下をくぐり抜け、敵艦の真下で起爆する

ことが可能だったのだ。普通に敵艦に命中しても爆発するので、複式と呼ばれていた。もっとも、そうしたイギリス軍の工夫の他に、イタリア軍の失策も雷撃を可能にさせていた。肝心の水雷防御網が完全には張られていなかったのだ。カンピオニ大將はクレタ島のスーダ湾のイギリス前線基地を砲撃しようと考え、翌朝の出港のために一部の網を片づけていたからだ。だがこの砲撃は、もはや実施されることはなかった。

爆撃隊の方も、残りの巡洋艦や駆逐艦に

タラント港に進入した。高度はわずかに一、二メートル。車輪が水面を弾く機体も何機もあった。

ウィリアムスン少佐が直率する第1小隊三機は、湾口にある小さなサン・ペトロ島上空を通過。隊長機は魚雷投下直後に、対空砲火の直撃を浴びて墜落した。魚雷の方は無事に駛走し、戦艦コンテ・ディ・カプールの舷側で炸裂した。二機の列機は、戦艦アンドレア・ドリアを狙ったが、こちらは命中しなかった。

第2小隊は湾の北側から弧を描くように進入し、ウィリアムスンほどの砲火は浴びなかった。先導機の投下した魚雷は、新鋭戦艦リットリオの右舷艦首に命中。二番機は左舷に直撃を与え、リットリオはたちまち艦首から沈下を始めた。

三番機は、カンピオニ大將の旗艦ヴィットリオ・ヴェネトを狙ったが、命中は得られなかった。



タラント奇襲の主役“ソードフィッシュ”

第2次大戦を通してイギリス海軍の第一線で活躍した何でも屋の“ストリングバック”

(白石 光)

1930年代中頃、英艦隊航空隊は雷撃機兼偵察機を求めていた。これに応えたのが、フェアリー社のソードフィッシュ（メカジキの意）であった。時代は複葉機から単葉機への変換期であり、本機のような複葉機は早晩旧式化すると見られていたが、複葉機ならではの優れた空力特性により、離発艦が容易なうえに運動性能も良好だったため、艦隊航空隊は早速、本機の採用に踏み切った。

ソードフィッシュは空母機として有名だが、初期生産型のMk-Iはコンパチブル・モデルで、車輪を装着すれば空母機、フロートを装着すれば水上機として運用することができた。生産型式は、このMk-Iの他にIIとIII、さらに、IIとIIIを改造して開放式コックピットを密閉式に改めたMk-IVがあり、合計2396機も生産された。

最高速度222kmの低速ながら、古い「ストリングバック（お買物バッグの意、ソードフィッシュの愛称）」には、ありとあらゆるものを詰め込むことができた。最新装備のレーダーやリーライト（対潜哨戒用強力照明灯）を装着し、必要に応じて航空魚雷、爆弾、ロケット弾、爆雷など多様な武装を搭載、雷撃、爆撃、対潜哨戒、偵察、救難、連絡通信とさまざまな任務をこなしたのである。枢軸軍側が空母を保有せず、洋上での戦闘機の運用が少ないこともあり、第2次大戦全期間を通して、大西洋戦域で大活躍した。なお、最終生産機がロールアウトしたのは、なんと1944年8月18日のことだった。

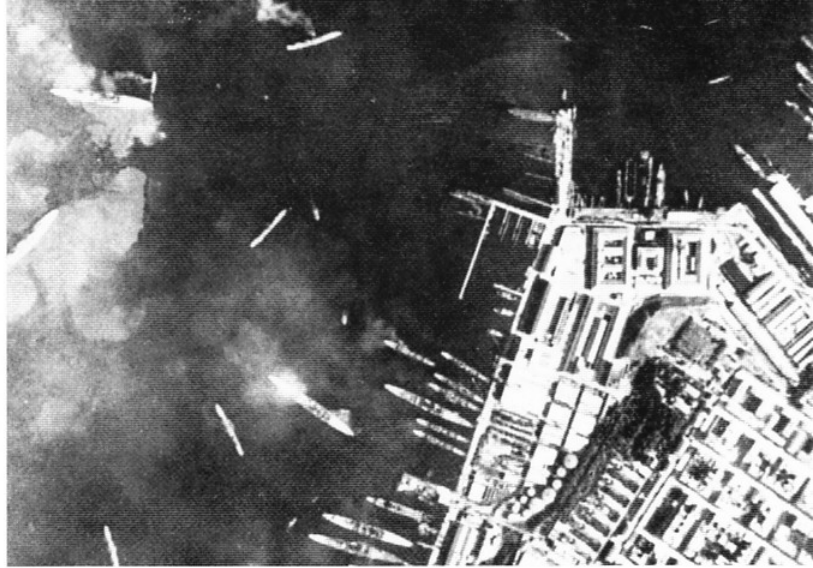
攻撃を加え、水上機格納庫をも炎上させていた。

この頃になると、さすがにイタリア軍も事態に気づいて、本格的に迎撃してきた。湾の高射砲や艦艇の対空砲、機銃が空に向けて激しく火を撃ち上げてくる。

炎上する軍港と対空砲火。ソードフィッシュの吹きさらしの座席から眺める光景は、壮絶なものだった。この作戦で最初に照明弾を投下したチャールス・ラムは、その著書「雷撃」の中で「シシリー島のエトナ火

山が大噴火したようだった」（宇田道夫記）と述べている。しかし地上の被害は同士討ちも含まれていた。イタリア軍の対空砲火の一部は、タラント市街で炸裂したようだった。

およそ一時間後の二三時五五分、「大噴火」が続く軍港上に、ヘイル少佐が指揮する第二次攻撃隊が到着した。第二次攻撃隊の九機のソードフィッシュ中、五機が雷撃、四機が爆撃である。攻撃隊はウィリアムスン隊同様、果敢に攻撃を加え、戦果の拡大



空襲を受けたタラント軍港。画面左の被弾して煙を上げ、海面に油を流しているのがイタリア戦艦と思われる。

に努めた。
雷撃隊は猛烈な対空砲火や阻塞気球の下をくぐり抜け、魚雷を投下した。軍港内を駛走した魚雷は、第一次攻撃で被雷していたリットリオにふたたび痛打を与え、戦艦カイオ・デュイリオの前部から巨大な水柱を噴き上げさせた。爆撃隊も夜空から舞い降りて、徹甲爆弾を施設にたたきつけ、重巡トレントにも直撃を与えた。
攻撃を終えたソードフィッシュは、来るときと同じように夜陰にまぎれて撤収した。

あとには炎と黒煙に覆われ、砲声が絶えない軍港が残るだけだった。被弾した機もあったが、母艦のイラストリアスには一九機が十二日の三時まで帰投できた。未帰還機は二機で、そのうちの二機は、第一次攻撃隊を指揮していたウィリアムス少佐機であった。少佐は同乗していたスカーレット大尉とともに撃墜後に捕まり、戦中を捕虜として過ごすことになった。もう一機は、第二次攻撃隊のベイレイ大尉とスローター大尉のペア機だが、どのような最期を遂げたのかは不明である。

それでも敵本土の軍港に突入して、未帰還がわずか二機で済んだのは驚くべきことで、隊員たちの技量と勇気は称賛に値する。また隊員たちにとって幸運だったのは、イラストリアスにはイーグルになかった新式の誘導ビーコンが装備されていたことである。この装備がなければ、夜間の長距離飛行によって未帰還機がもっと増えてもおかしうはなかったのだ。
ボイド艦長は帰還した隊員たちをねぎらい、イラストリアスは、カニンガムのウォースパイと夜明けに合流した。

【タラント奇襲の戦果とその後】

十二日の早朝のうちに、マルタ島のグレ

ン・マーティン偵察機がタラントに飛び、軍港の様子を撮影した。

戦果が不十分の場合は、第二回目の攻撃が必要だろうとされていた。次回はイタリア人たちがそう易々と接近を許さないだろう。死地から還ってきたばかりの隊員たちは、固唾を呑んでジャッジメント（審判）を待ち、かたやボイド艦長は、嵐が来て欲しいと祈った。事実、十二日の天候は悪化し、ボイドとライスターはそれをカニンガム大将に伝えた際、電報に「タラントはすでに閣下の掌中の島」とつけ加えた。

午後になり、写真判定の結果が報告されてきた。それはボイドたちが打った電文が、現実と化したことを物語っていた。タラント軍港ではイタリアの主力艦が何隻も着底し、黒い油が湾に広がっていたのだ。ソードフィッシュの奮闘により「ジャッジメント作戦」は大成成功だった。

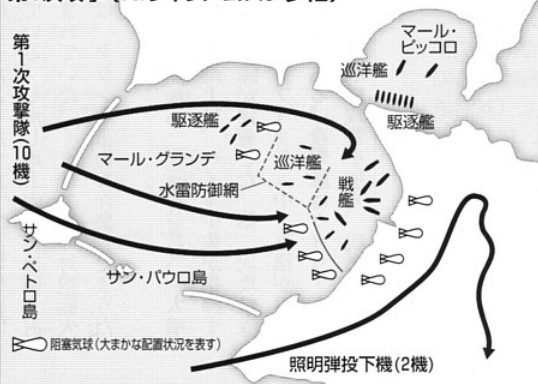
最大の攻撃目標だったイタリア戦艦群の被害は次のようになっていた。

- ・新式戦艦リットリオ・魚雷三本が命中。大破、着底（資料によっては一本あるいは四本としているものもある）。
- ・旧式戦艦カイオ・デュイリオ・魚雷一本が命中。着底。
- ・旧式戦艦コンテ・ディ・カプール・魚雷一本が命中。着底。

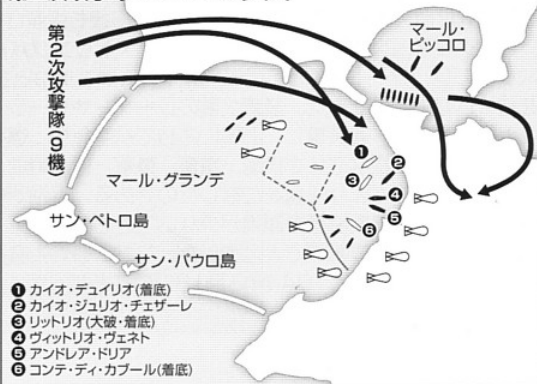
魚雷が命中した戦艦は、すべて着底した。港だから着底で済んだが、これが港の外ならば確実に沈没していたところだ。

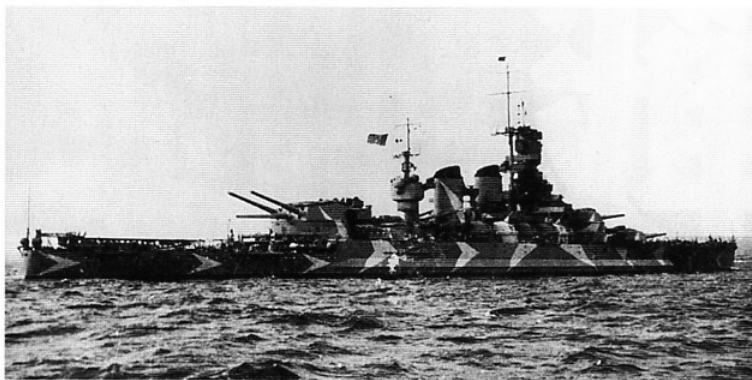
タラント奇襲 (1940年11月11~12日)

第1次攻撃 (K.ウィリアムス少佐)



第2次攻撃 (J.W.ヘイル少佐)





当時リットリオはまだ竣工もない新鋭戦艦だったが、タラント奇襲により最も大きな被害を受けた。

イタリア海軍の軍艦は、伝統的に速度を重視している。大改装後の旧式戦艦が二八ノット、新式戦艦で三〇ノットと、いずれもイギリス戦艦よりも優速だ。

各国の戦艦は水中防御力を強化するため*バルジを装着したが、イタリアの技術陣は推進抵抗が増大して速度が低下することを嫌い、別の方法を採用した。艦底側部内を多重円筒構造としたフリーゼ式防弾構造である。

旧式艦の改造にも、新式戦艦の建造にも採用されたフリーゼ式は、水中爆発の衝撃を吸収するはずだったが、タラントの結果を見るかぎり、その効果はなかったようだ。あまりの脆さに、自国の港だということとで防水扉を開放していたのではないか、という説すらあるが、真相は不明である。

着底した戦艦の中で、リットリオは最優先で浮揚・修理されたが、艦隊に復帰できたのは四か月後の一九四一年三月末だった。カイオ・デュイリオの修理が完了したのは同年五月中旬、コンテ・ディ・カプーリにいたっては、浮揚後にトリエステまで回航して修理されたが、結局イタリアの降伏時までに復帰することはなかった。

一晩のうちに、六隻の戦艦のうち三隻までを（一時的に）失ったイタリア軍の衝撃は計り知れないものがあつた。

奇襲を許した落ち度はカンピオニ大將にある。軍港ならば安全だという油断が、これほどの大損害を生じさせたのだ。連日の英軍偵察機の侵入を許し、防空態勢を作ることができなかった空軍にも非はある。

落胆したカンピオニは、タラント港を事実上放棄し、残った戦艦三隻を北のナポリへ移動させてしまった。以後、ただでさえ消極的なイタリア海軍はますます動かなくなってしまう。燃料不足以上に、戦意が乏しくなってしまったのだ。

カニング大將は賭けに勝った。こうして、作戦後、イラストリアスのボイド艦長は、地中海はイタリア人たちの「われらの

海（マーレ・ノストラム）から、「カニングの池」になったと評した。

イギリス軍もまたタラント奇襲の戦果を大々的にアピールしたが、空母機ではなく、陸上機による作戦だったと発表した。今後のことを考え、敵に手の内を明かすことはいらないと考へたのである。もっとも、その機密とイラストリアスの名はわずか二、三日のうちに全ヨーロッパに広まってしまふ。ことがあまりに大きすぎたからだ。

ドイツのアドルフ・ヒトラー総統は、ただちにゲーリング空軍元帥を呼び、いかなる手を使ってもイラストリアスを撃沈するように命令した。その後、ドイツ軍はギリシャ、地中海、北アフリカの戦線にも派兵を開始するが、イラストリアスは何度も危機的な状況を迎えつつも、ついに終戦まで生き残るのである。

ちなみに旧式のソードフィッシュは、後継機開発の失敗もあって、大戦のほぼ全期間を第一線で使用された。その総撃沈数は、九七艦攻やデバステーターをはるかに上まわる。

イギリス軍のジャッジメント作戦の成功は、空母機による敵軍港への奇襲攻撃という点で、戦史上エポック・メイキングな出来事といえる。

アメリカ海軍は、すでに八年前の大演習でそのことを検討していた（当時の指揮官だったヤーネルは、空母の集中運用すら唱えていた）。しかしタラントから一三か月後、戦訓を生かしたのはアメリカではなく、

日本海軍だった。

連合艦隊司令長官、山本五十六大將が立案した開戦劈頭のバールハーバー攻撃は、攻撃目標までの距離、母艦数、飛行機数、いずれもタラントと比べて桁違いのスケールの作戦だった。タラントにはなかったレーダーを持ちながらも、アメリカ軍は日本軍の奇襲を阻止することができず、バールハーバーの太平洋艦隊は壊滅的な被害を被つたのである。

山本が空母機によるバールハーバー奇襲の構想を、初めて他者に漏らしたのは一九四〇年十一月下旬とされている。相手は及川古志郎海軍大臣である。このときは口頭だったが、翌四一年一月七日付けの書簡でやはり及川に構想の骨子を伝えている。

書簡にはタラントに関する記述はないが、時期的に山本が知っていた可能性は高い。たとえこの時点で知らなくとも、国際情勢や航空兵力に強い関心を持つ山本が、さほど時を経ず耳にしたことは間違いない。タラントでのイギリス軍の大戦果を知り、我々が意を強くしたことだろう。

バールハーバー奇襲からわずか二日後、イギリス海軍の新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズが日本機によって撃沈される。タラントで飛行機の前に戦艦が無力であることを示したイギリスが日本軍にお株を奪われたのは皮肉である。

もっとも、その日本軍の戦艦も、のちに航空機によって沈められる運命にあったのだが……。